

平成 30 年度 神奈川県立保健福祉大学  
一般入試（後期日程）

小論文試験  
問題用紙

- 指示があるまでは中を見てはいけません。
- 解答はすべて解答用紙に記入してください。

## 問題

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

わたしは「いない」より「いる」ほうがほんとうによかったのか……。

六十近くまで生きてきて、この問いからわたしはまだ放たれていない。なにか他人の役に立てることをまったくしてこなかったわけではないし、またそうしようときには力をふりしほってもきた。けれども、わたしがいたせいで厄介なめ、難儀なめにあったひともし少なからずいる。わたしがいるせいで苦しんだひともある。わたしとかわることがなければ、別のもう少しましな人生を送れたのではないかとおもうひともしきつといるだろう。

「功罪半す<sup>なまは</sup>」という言葉があるが、わたしの存在もきつとそういうものなのだろう。とすれば、わたしはいなくてもよかったということになる。つまり、わたしは「いない」より「いる」ほうがほんとうによかったのかという問いに、わたしは結局イエスと答えられないことになる。

これとは少し違う意味で、いまは、じぶんの存在をそのまま肯定することがむずかしい時代なのだとおもう。ひとは仕事につくときに、これはほんとうにじぶんにしかできないことなのだろうか、つい考えてしまう。じぶんがしていることになにか意味を見つけると、やる気が生まれるというのはひとの常だが、その意味を「じぶんにしかできないこと」というふうに考えることには無理がある。そんな仕事は長く仕事をつづけるなかでようやくと見つかったり見つからなかつたりするものだからだ。

ひとはどうしてそんな無理な問いをじぶんに向けるようになったのか。それも仕事につく前に、あるいは仕事をしている最中に。

「近代」と呼ばれる社会を迎える前は、ほとんどの人生は出自で決まっていた。「生まれ」という、偶然的な存在条件に、たとえばどのような地域のどの階層に、どんな家族のもとに生まれ落ちたか、どちらの性に生まれついたかによって、人生の輪郭がほぼ決まってしまうような社会に、ひとは生きていた。そういう出自の偶然性に強く左右される社会から解放されることを願って、ひとは社会を「近代的」なものへと造りかえた。以後、(あくまで理念のうえでは)ひとはじぶんの存在をじぶんで選び、決めることができるようになった。家業を継がなくてもよくなったし、望めば高等教育を受けることもできるようになったし、人生の伴侶もじぶんで選べるようになった。

しかし、この自由を得ることによって、ひとは別の重荷を背負うことになった。人生の形をじぶんで選んだ以上、できあがったその形に責任があるのは、他でもないこのじぶんだということになったからである。この家に生まれたからこうなった、こうしかできなかつたとは、もう言えなくなつたのである。

たしかにひとの人生は、たいていは「功罪半す」という類のものなのだろう。なにかの達成はかならず他のだれかの犠牲をとまうものだろう。だとすれば、わたしは「いない」より「いる」ほうがほんとうによかったのかという問いについては、わたしは「いる」ほうがよかつたとも言えるし、「いない」ほうがよかつたとも言える、としか答えようがないということになる。

この問いは、生の側から発せられている。では、同じ問いを死の側から語りだせばどうなるか。「死は生に意味を与える無意味なのです」。ジャンケレヴィッチというフランスの思想家はこう語る。死んだら死につきりというが、たしかに死は無意味である。しかし、みずからの死であれ他者の死であれ、ひとが死ぬという出来事は他のひとにときに大きな空白を、あるいは忘れがたい想い出を残す。そのかぎり、死は「生に意味を与える無意味」であると言いうことができる。

わたしの最初の問いは、わたしが「いる」という事実(わたしの「生」)は無意味ではなかつたの

かという思いから発せられている。が、その思いをジャンケレヴィッチの言葉に重ねあわせれば、「生」もまた「死」とおなじく「生に意味を与える無意味」だということになる。

この無意味と向かいあうことをわたしは「課題」と呼びたいとおもう。なにか解決しなければならぬ「問題」には「答え」がある。しかし、人生の大半の問題には最後の「答え」はない。しかし、「答え」がないからといって問いが解消するわけではない。わたしの最初の問いなどはその例だ。この問いには確たる答えがないまま、それと向きあうしかない。というか、それと取り組むことにその問いの意味の大半がある。ケアするわたしをわたしとして認知してくれない親しい他者のケアなどにおいても、ひとはケアすることの意味を見失いかける。そういう答えがすぐに見つからない問いをわたしは、人生の「問題」ではなく、「課題」とさしあたって呼んでおきたい。

鷺田清一『大事なものは見えにくい』（I 問い 人生の「課題」）

角川文庫 十一三頁二〇一二年出版

問1 傍線部について、筆者は、なぜこのようにしか答えようがないと言っているのか、日本語八〇字以内で説明しなさい（字数は厳守すること）。

問2 本文における「問題」と「課題」とはそれぞれどのようなものか、説明しなさい（字数制限なし）。

問3 あなたにとって人生の「課題」とはなにか、また、それに対してどのような向き合っていくのか、あなた自身の考えを日本語七〇〇字以上八〇〇字以内で述べなさい（字数は厳守すること）。

